

弁当作りに取りかかっていたときだった。ジ、ジ、ジーツ、ジー。という音ははじめ、聞き流していたラジオからだと思つた。最近、この時間帯になぜか雑音がひどくなる。その内にキーツという、悲鳴のような声がかすかに混ざり、ただならぬ音に聞こえてきた。ラジオじゃない。落ち着かなく、いたたまれなくなる。ラジオ周り、冷蔵庫周り、外か？あちこちと見て回る。その場を離れば遠くなり、今いる台所でその音はしているに違ひなかつた。

借りている事務所二階の住居は、東と西に一部屋ずつだ。一方から移動する通路に、ちよつと張り出したスペースで台所はある。流し台を差し引けば二畳あるかどうか。風呂もトイレも洗面台も、すべて台所向かい側の、この通路に面している。

時々、コバエが発生する。台所で殺虫剤を使いたくないので、昔からある粘着紙のハエ取り紙を吊すことにした。手のひらに入るほどの円筒の蓋を開け、取説に従ひ天井に押しピンで留める。渦巻きに収められていた3センチ巾ほどの粘着リボンがゆつくりと延びて、緩くカーブしたまま頭上で止まつた。

ポツポツと、黒ごまのようにコバエが付いてゆく。その粘着リボンの上の方に、大きいハエがくつついていた。この二階ではほとんど見ない、イエバエのようだ。「ジージー」は、ハエが逃れようとして震わす羽の音だった。片方の羽がリボンにくつつき、自由な方の羽を震わせもがいているようだ。

なーんだ。音の元が分かつて納得し、そのまま無視しようとした。だが、思い出した。キーツと聞こえたあれは悲鳴だったのだろうか。ハエも命の危険を感じたら悲鳴を上げるのだろうか。ちよつと気になる。もう一度見上げてみる。ジー、ジー。休みなく羽を震わせている。

どれほどもがいても、くつついた羽が剥がれることはないだろう。けれどハエは、自由になろうと残つた羽を震わせ続けるに違ひない。いつまで。力尽きるまで。・・・餓死するまで？ それはあまりにムゴイと思つた。

食品や器を冷蔵庫と食器棚にしまい、殺虫剤のスプレーを持ってきて椅子に上がった。そこから見上げた先に、もがくハエがいた。頭を向こうに、リボンにくつついた羽を下にした、横向きの姿勢だ。早く楽にしてやろうとの思いでスプレーを噴く。一度、二度。粘着リボンが揺れる。羽音は急に倍もの速度になった。えっ、えっ!? 急ぎもう一度狙つて噴く。急速の羽音は続く。そして。

黒いハエの体から、米粒状の白いものがヌーツと押し出されてきた。その間、多分一秒。直後、羽音が止まつた。

卵を産んだ!

死ぬ前に。死ぬことが分かつてから、断末魔の中から。なんということをするのだろうか。

押し出されてきたそれは、私に向かって差し出されたように、託されたように見えて、スプレーを掴んだまま呆然としばらく動けなかった。

けれど、ハエに感情なんてもつものか。米粒よりもっと小さく見える卵は、退治しなければならぬ。マスキングテープを輪っかにして近づけると、簡単にくっついて取れた。

粘着部分を折りたたみ折りたたみ、ぐるぐる巻きの塊にして、ゴミ箱に捨てる。――
終わり。

私に向かって産み出されてきた一秒間の、しかしなんと長く重かったことか。種を残そうとする小動物の習い性かも知れないが、心の隅にも産み落とされたようで、時折「あの一秒」がよみがえって仕方がない。